

一一一 学期は、臨時休校で始まった。松江の積雪はさほどでもなかったが、数年に一度の寒波と繰り返し言われたごとく、風雪と低温は久しぶりの厳しさだった。

以前暮らした奥出雲は豪雪地帯だったので、毎年恒例のように大雪を経験した。今回は一メートルを超える積雪に見舞われていると聞いた。

深夜ふと目が覚める。起こすのは、除雪車の微かな振動を伴う低いエンジン音とギアをバックに入れた際の甲高い警告音だ。それらが聞こえ始めた時間と警告音の間隔で、およその積雪量がわかる。睡眠不足のぼんやりとした頭で「今日は何曜日だったか」とまず考える。平日ならばため息をつき、あとどれほどで起き出すか計算を始める。車に積み上がった雪を落として運ぶのにどれくらいかかるか見当をつけねばならない。通勤時間だって倍で済むものやら。

雪質によっても作業にかかる時間は異なる。粉雪ならば軽くはあるが、異常な低温が起き出すのにも負荷をかけてくる。一度は、たつぷりと水気を含んだ雪が一気に積もったことがある。スコップを当てて穴を開けると発光しているかのように青い光が乱反射するのだった。その美しさに見惚れつつもずしりと重い雪に関節がきしんだ。雪も実にさまざまだ。

「よくやってたよね。」

窓の外で吹き荒れる粉雪を見ながら妻が言った。除雪車に起こされることもないこの町で暮らすようになって四回目の冬、何時間も早く起き出して雪かきせねばならなかったことなどずいぶん前のことに思えてくる。体が覚えていた一つ一つの作業もすっかり剥がれ落ちてしまっているだろう。

「若かったってことかな。」

あのときも今も、雪かきをしているのはほとんどぼくたちよりもずっと年上の人たちで、とてもその前で言えることじゃないのだけど、強いられてもしない限り、雪との力の差は年ごとに広がるばかりだ。

「行けるものなら行つてます。雪のないところへ。」

雪かきの手を止めて、ぼくにそう言ったその人は笑っていないかった。今も、押し黙って雪かきを続けているのだろうか。

いや、待て。いい記憶だって並べないと雪に悪い。すべての音が雪に吸われて寝静まる町。明日は滑り台をこしらえてやろう。家の前の無駄に急な坂がボブスレーコースみたいになるぞ。赤い櫛にすっぽり収まって歓声を上げるまだ小さな子どもたち。どれ、お父さんにも。ああ、やっぱり若かったってことか。

夕焼け通信1290号 2021.1.11

〒690-0823 島根県松江市西川津町4276-B402
miyaken@me.com gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/
編集 宮森健次



專業ババ奮闘記 (その2) 36

木幡智恵美

出産 (3)

娘の第三子は、予定日であった夫の誕生日ではなく、私の母の誕生日と同じ一月十四日に生まれた。「大きい祖母ちゃん(私の母のこと)と同じか」娘がぼつりと言う。紐落としての着物姿を見せに行った時、病院のベッドの上で「まあ可愛い」と涙ぐんでいた母が、娘の目に映った最後の姿だった。生まれてから約二年、松江の家に帰るまで、ずっとそばに寄り添ってくれていた大きい祖母ちゃんが大好きだった娘には、第三子が同じ日に生まれたことが、偶然ではない気がしたのである。

かくして、我が家の食卓は六人になった。子どもたちが次々に家を出てから、五人、四人、一時期は三人まで減ったこともあった。それでも六人の時代が長かったので、テーブル席が埋まると懐かしい。けれども、日々続くとなれば、背中に重いものを感じる。その夜、早速思い知ることになる。何とか夕食を終え、夫が子どもたちを風呂に入れて、寛大、実歩と順に上がってくるほかほかの体を拭いて保湿のクリームを塗り、ドライヤーで髪を乾かし、服を着せる。風呂から上がった夫に二人の歯磨きを頼み、義母の部屋へ。すでに湯たんぽは入れてある。電気毛布のスイッチを入れ、エアコンにタイマーをかける。トイレに連れて行つたあと、「痛い」を連発する義母を着替えさせ、ベッドに寝かせる。

あとは、寛大と実歩に専念だ。トイレに行かせた後、二階に連れて上がる。休みの日にうちに来た時、昼寝の前にいつもするように、一冊ずつ絵本を読んでやり、絵本が終わるとお話をしてやる。桃太郎、浦島太郎、一寸法師。大概二つ目の話の途中で二人とも眠る。これでほっと一息だ。娘の部屋にセットした炬燵に入つて、焼酎の湯割りを一杯味わいながら飲む。作夜中からバタバタ続きの一日を振り返る。そうか、あまり眠っていないのだった。アルコールはたちまち効いてきて、瞼がくつきそうになる。部屋に戻つて実歩の隣に入る。すぐに眠りに落ちた。が、すこやかな眠りは長くは続かなかつた。まず、実歩が枕の上まで上がっている。布団の中に戻し、次に目を開けると、寛大が掛け布団の上で反対向きになっていた。体を抱えて元に戻す。重い。これを何度繰り返しただろう。

30代フリーター やあ、ジイさん。政府が新型コロナウイルスに対応する2度目の緊急事態宣言を1都3県に出した。「医療崩壊」を懸念する知事らに押し切られたと報じられている。

年金生活者 日本の病床数は世界一(人口あたり)、感染者数・死者数は欧米の約50分の1(同)なのに、なぜ「医療崩壊」の危機と言われるのか。医師・医療経済ジャーナリストの森田洋之はそう問い、医療システムの「圧倒的な機動性の低さ」にその理由があると指摘する(『「医療崩壊」を叫ぶほどに見えなくなる『日本医療の根本の問題』、12月9日アゴラ)。

「機動性」とは、感染の拡大に応じて臨機応変に専用の病床やスタッフを増やしたり、地域を超えてそれらを融通し合ったりできる対応力を指す。欧米ではそれができるから、日本の50倍の感染者が出て、「医療崩壊」しないで済んでいる、と森田は言う。

日本で同じことができないのは「病院の8割が民間で、基本的にお互いが

にした。それだけ医療に対する期待が高まり、自然法則によって決まる人の寿命を医療がコントロールできるかのような観念が生まれた。

国家は富を再分配して経済を循環させることを使命のひとつとしている。経済の停滞を招くことはおのれの存在理由を自ら否定するに等しい。それを「医療権力」に強いられて、不本意ながらやったのが非常事態宣言だ。

30代 三上の言葉を借りれば菅政権も「身体が動かない」状態にある。年金 政権の主体性を削ぐ力は3つある。ひとつは「医療権力」であり、コロナに関しては政府の分科会や医師会に代表される。もうひとつは市場であり、経済団体などに代表されるそれは「市場権力」と名づけることができる。そして3つ目は霞が関の官僚組織であり、これは「官僚権力」と言っている。いずれも政権の持つ「政治権力」に対抗できる力を持っている。

菅政権はコロナをめぐるこの3つの権力に圧迫され、思い通りに振る舞

ライバルであること、そして国の指揮命令系統が及びにくいということが大きく影響している」と言うのが森田の見方だ。

30代 今の日本の政府は医療界を基本的なところでコントロールできない状態にあるということか。

年金 それはグローバル化の進展とともに市場のコントロールに手こずるようになった世界は諸国家の姿と相似形をなしている。権力という観点から見ると、「医療権力」とも呼ぶべき、新たに成長した権力が、既存の「政治権力」を脅かしていると考えられることができる。「医療権力」はおのれの存続を維持するために、なによりも「医療崩壊」の阻止を最優先させる。そのやり方は「崩壊」しない医療システムに改めることではなく、現状を維持したまま国民の行動を制限することだ。それが大規模な経済停滞を招き、倒産、失業、自殺を誘発しているのが今の日本だ。

三上治はコロナによって退陣に追い

えない状態にある。3つの中で最も優位に立っているのが「医療権力」だ。これに押され続けてきた政権が唯一公然と抵抗の意思を示していたのが「GOTOトラベル」にほかならない。そこには「市場権力」からの圧力が働い

込まれた安倍晋三について「新型コロナウイルスは各国の政治指導者にどう対応するかを試練を課したのであるが、安倍は『身体が動かない』という反応になった」と書いている(『「人生わずか五十年、夢幻のごとくなり』というけれど』、『流砂』19号)。これは、感染症という「医療権力」の仕切る領分に政権がほとんど手を出せなかったということでもある。

縦割り行政や前例主義の打破を掲げる菅政権とって、医療システムの「機動性」を妨げる「縦割り」と、「前例」を守り続ける「医療権力」は、メスを入れるべき対象となるはずだが、手をつけることができないでいる。

30代 なぜ医療の力がここまで大きくなったんだ。

年金 昔なら王侯貴族だけが求めた不老長寿を一般の国民が求めるようになったからだ。その背景には資本主義の高度化が加速する富の稀少性の縮減がある。選択的消費が必需的消費を上回り、国民は医療にカネを使う余力を手

ていた。だが、感染拡大とともにいつそう優位性を増した「医療権力」に逆らい続けることはできなかった。

「医療崩壊」を阻むには現在の医療システムの改変が避けられない。だが、それによって自らの力を削がれることを恐れる「医療権力」は進んで改変しようとはしない。それができるのは「政治権力」だ。だが、そのために法律をつくったり、変えたりすることに、「官僚権力」、とりわけ既得権を守りたい厚生労働省が進んで協力しようとするのではないだろう。

安倍・菅政権は政治主導の名のもとに霞が関の幹部人事を一手に握る内閣人事局を新設し、高級官僚を人事で脅して言うことを聞かせてきた。だが、医療システムの改変という規模の大きな事業となると、組織全体を動かす必要があり、それは人事の脅しだけではできない。改変のビジョンを組織全体に共有させる必要がある。だが、ビジョンを描くのは菅政権の最も不得手とするこのひとつだ。

ニュース日記 768
中村 礼治

コロナは「医療権力」の姿をあらわにした